



Data

監督: ドノヴァン・マーシュ
 原作: ジョージ・ウォーレス&ド
 ン・キース『ハンターキラー
 潜航せよ』(ハヤカワ文庫)
 出演: ジェラルド・バトラー/ゲイ
 リー・オールドマン/コモン
 /リンダ・カーデリーニ/ト
 ビー・スティーヴンス

👁️👁️ みどころ

「潜水艦ものに外れなし」の映画格言がありながら、近時その手の名作が少なかったのは、潜水艦テクノロジーの急激な進歩にフィクションがおいづかなくなつたため。しかし、22年間も米原子力潜水艦隊に勤務した元潜水艦長が自ら作家となった原作があれば！

米原潜とネービーシールズによるロシア大統領救出作戦！？そんなバカな！たしかに、現在のトランプ大統領とプーチン大統領の間ではありえないだろうが、映画ならOK。それがマンガ的にならず、リアルなフィクションになっているのはさすがだ。

古くは「潜水艦もの」のバイブルとも言える『U・ボート』(81年)と対比し、新しくは5月24日公開の『空母いぶき』と対比させながら、そのスリルと緊張感をしっかり味わいたい。そして、最後はやっぱり平和はいいものだ、という実感を・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■「潜水艦ものに外れなし」を再確認！■□■

密室モノは面白い！潜水艦モノは面白い！それが私の持論だが、本件のパンフレットには秋本鉄次氏(映画評論家)の「映画格言『潜水艦ものに外れなし』は本当だ！」というESSAYがある。そこでは『『眼下の敵』、『U・ボート』、『レッド・オクトーバーを追え』・・・そして、この『ハンターキラー 潜航せよ』に至るまでの潜水艦映画小史とその魅力！』について要領よく書かれているので、こりゃ必読！

私の映画評論では、『U・ボート(ディレクターズ・カット版)』(97年)については詳

しく書いている（『シネマ 16』304 頁）し、『K-19』（02 年）（『シネマ 2』97 頁）、『ローレライ』（05 年）（『シネマ 7』51 頁）、『Uボート 最後の決断』（03 年）（『シネマ 7』60 頁）等についても書いている。「潜水艦モノ」の名作として、古くは『眼下の敵』（57 年）や、『深く静かに潜航せよ』（58 年）等があった。しかし、1980 年～90 年代の潜水艦モノの傑作は『レッド・オクトーバーを追え！』（90 年）と、私は観ていないが『クリムゾン・タイド』（95 年）くらい。また、2000 年代では『K-19』（02 年）くらいしかない。これは潜水艦テクノロジーの急激な進歩という現実、フィクションが追いつけなくなった、結果らしい。そんな中、久々の「潜水艦もの」として本作が登場！こりゃ必見！

私が本作を観た日、大人気のハリウッド大作『アベンジャーズ エンドゲーム』（19 年）は満席に近かったが、本作はガラガラで観客は約 10 名だけ。興行収入もジェラルド・バトラー主演作としては異例の低さだそうだし、サイト側による批評家の見解の要約は「潜水艦を舞台にした作品の多くと同様、『ハンターキラー 潜航せよ』は陰鬱な雰囲気アクション映画になっている。そのおざなりなストーリー展開は他の作品で何回も展開されたものをなぞっている」とされているようだ。しかし、私はそんな評価に納得できず、本作は断固星 5 つに！

■□■「潜水艦モノには知識も必要！何がどう変化？」■□■

本作のパンフレットには、大塚好古氏（軍事史研究家）の「潜水艦のディープな世界へようこそ」もあり、その中で、「アーカンソー、タンパ・ベイ、コーニク等の本作に登場する潜水艦の基礎知識や、ソナー、囮（デコイ）、音波センサー、ビーコン、磁気センサー等の潜水艦の基礎用語」があるので、これも必読！

『U・ボート』（81 年）の時代では、艦長が潜望鏡で敵艦を見ながら「魚雷発射！」と命令するシークエンスが緊張感いっぱい面白かったが、今やそれは時代遅れ。潜水艦がいくら狭いと言っても、今はそれなりに広く立派な指令室の中で、大きなパネルを見ながら指示を出すスタイルに変わっている。また、敵潜水艦からの魚雷に対しても、デコイ（囮）で対抗する技術が備わっているし、ミサイルや爆雷に対しても様々な防御システムが備わっている。したがって、「潜水艦モノ」を正しく理解し、楽しむためにはこれらの新たな知識の補充が必要だ。さらに、潜水艦の航行能力や攻撃能力が圧倒的に強化される中、潜水艦の任務も、かつての「U・ボート」に与えられた（無力）敵輸送船団への打撃という低レベル（？）のものから、本作のような、あっと驚くとてつもない任務に変わってきているので、それにも注目！

なお、日本では 5 月 24 日から『空母いぶき』（18 年）が公開されるが、そこでも「空母いぶき」を旗艦とする第 5 護衛隊群の護衛として、駆逐艦の他、潜水艦はやしおがついている。そのはやしおは沖ノ鳥島の西方 450 キロ、波照間群島初島で起きた、国籍不明の武装集団による上陸＝占領への対応について大きな役割を果たすので、是非本作と併せ

て同作も鑑賞し、そこでも「潜水艦モノに外れなし」の面白みを味わいたい。

■元潜水艦長が書いた原作だから、超リアル！■

本作は、米海軍攻撃型原子力潜水艦ヒューストンの元艦長だったジョージ・ウォーレスがドン・キースと共同執筆した原作小説『Firing Point』（ハンターキラー 潜航せよ）を映画化したもの。しかも、本作のプロダクションノートによれば、米海軍の本物の潜水艦の撮影が許可されたため、映画史上初の最新鋭潜水艦を完璧に再現することができたらしい。そのため、本作では『U・ボート』とは全く異質な、高性能で広い潜水艦の司令部の姿をリアルに鑑賞できるから、それに注目！

本作のリアルさは潜水艦の内部だけではなく、ストーリー構成でも際立っている。本作の物語の基本構造は「ハンターキラー」こと米攻撃型原子力潜水艦アーカンソーが、ロシアのコラ半島沖にあるポリャルヌイ海軍基地からロシア大統領ニコライ・ザカリン（アレクサンドル・ディアチェンコ）を救出するという、かなり現実離れたもの(?)だから、描き方によってはマンガ的になってしまう恐れもある。また、去る4月25日に北朝鮮の金正恩委員長とはじめての露朝首脳会談をすませたロシアのプーチン大統領はあくまで強面だから、「俺はニコライ・ザカリンのような弱腰大統領ではない！」と怒り狂うかもしれない。しかし、1947年生まれで22年間も米原潜艦隊に勤務し、1995年に作家デビューしたというジョージ・ウォーレスの原作は、フィクションとノンフィクションを上手く交えながら、そんな基本ストーリーをスリル満点に展開させていくのでそれに注目！『空母いぶき』も「すわ戦争勃発か！」というギリギリのところでハッピーエンドを迎えたが、本作でも「遂に、米ソの全面戦争勃発か！」というギリギリのところまでストーリーを引っ張っていき、最後の最後をハッピーエンドにさせる手法はお見事だ。

本作冒頭は、ロシアのコラ半島沖の海中深くで、ロシアの原潜コーニクを追尾中の米海軍原子力潜水艦タンパ・ベイが攻撃を受けて沈没するシークエンスから始まる。そのため、遭難場所で2つの爆発を探知した米国防総省（ペンタゴン）の国家軍事指揮センターは大騒ぎだ。そこで、海軍少将ジョン・フィスクは統合参謀本部議長チャールズ・ドネガン（ゲイリー・オールドマン）の指示を仰ぎ、ハンターキラー攻撃型原潜アーカンソーの現場への派遣を決定したが、その艦長は誰に？そして、その任務はナニ？

■海軍兵学校の卒業期は？副長は？■

司馬遼太郎の『坂の上の雲』を読めば、陸軍では陸軍士官学校と陸軍大学校、海軍では海軍兵学校と海軍大学校がエリート軍人の養成学校であることがよくわかる。ちなみに、兄の旧陸軍大将、秋山好古は陸軍士官学校旧3期、弟の旧海軍中将、秋山真之は海軍兵学校17期だ。それと同じように、米海軍のエリート軍人を養成する機関は「海軍兵学校」だから、潜水艦を含む軍艦の艦長は当然すべてその卒業生になる。したがって、フィスク

からコラ半島沖に派遣される原潜アーカンソーの艦長がジョー・グラスだと聞き、軍人トップのチャールズ・ドネガンが「その男は何期だ？」と質問したのは当然。

ところが、その回答は「海軍兵学校は出ていません」だったから、ビックリ！これは小説の上だからのことで、現実にはありえないことだが、グラス艦長は出撃した直後に、新任の自分についての噂話で館内が騒がしいことに気づき、全乗員に「自分は海軍兵学校を出ていないが、現場で経験を積み、諸君のことはよくわかる。」、そして「諸君の仕事は私が責任を負う」と力強く宣言することによって、乗員たちの心をわしづかみに！？スクリーン上に見るグラスの艦長としての指揮ぶりは堂に入ったもので実にお見事だが、これも小説ならではのことで、なぜなら、指揮官を養成するための学校である兵学校で何年間か学ばなければ、指揮官としての役割や能力を身につけることは到底できないからだ。いくらソナー員から魚雷発射管清掃まで様々な現場を経験したとしても、それと指揮官としての能力とはあくまで別物なのだ。しかし、まあ本作ではその点の嘘っぽさ(?)は横に置き、あくまでジェラルド・バトラー演じるジョー・グラスの艦長としての能力・魅力のみならず、人間としての能力・魅力を堪能したい。

その点でもうひとつ私が面白いと思ったのは、有能ながら規則や命令にこだわる副長エドワーズ(カーター・マッキンタイア)との対比。コラ半島沖で魚雷を受けて沈没した米潜水艦のタンパ・ベイ近くに沈没していたロシア潜水艦コーニクに生存者がいることがわかると、グラス艦長はその救出を決断。結果的にコーニクの中には艦長のアンドロポフ(ミカエル・ニクヴィスト)が生存していたわけだが、この救出作戦はアーカンソーの本来の任務とは別のグラス艦長の勝手な判断だ。エドワーズが言うように「タンパ・ベイを沈めた奴ら」の救出が必要か否か、また妥当か否かはもとより、「本来の任務」を外れたうえ自艦の危険を冒してまでアンドロポフらの救出にチャレンジするのは如何なもの・・・？そう考えると、やはりグラス艦長は海軍兵学校で指揮官としての訓練を受けていない、所詮下士官上がり・・・？そう思わなくもないが、さて・・・？

■□■米国防総省(ペンタゴン)の指揮は？大統領の決断は？■□■

本作では、グラス艦長指揮する原子力潜水艦アーカンソーの行動を追う米国防総省(ペンタゴン)の国家軍事指揮センターの姿が映し出されるが、そこでの責任者は前述のチャールズ・ドネガン統合参謀本部議長。フィスクはその下で働く立場だし、国家安全保障局(NSA)所属でロシア事情に精通している女性ジェーン・ノーキスト(リンダ・カーデリーニ)はフィスクに協力している(だけの)立場だ。しかして、ペンタゴンの指揮のあり方は如何に？ちなみに『空母いぶき』では、いぶき内部の秋津艦長と新波副長の考え方の違いが際立っていたし、政府内部での強硬派は城山外務大臣だった。

コラ半島沖に派遣されたアーカンソーは、沈没していたロシアの原潜コーニクの救出作戦を遂行している間に、別の敵潜水艦から発射された魚雷を回避したうえ、逆にそのロシ

ア原潜を撃沈させたから、にわかには米ソ間に緊張が走ることに。そこで『空母いぶき』の城山外務大臣と同じように、本作で「直ちに応戦せよ」と強硬策を唱えたのが、ドネガン統合参謀本部議長だ。それに対してフィスクは「それこそロシア側の思う壺」だと反論。それを最終的に判断するのは『空母いぶき』では垂水総理だったが、本作ではもちろん米国防総長だ。もし、それがドナルド・トランプ大統領だったら、きっとドネガンの強硬策に乗るだろうが、さて本作に登場する某女性大統領の決断は・・・？

■ロシアでは国防相が大統領を監禁！こりゃクーデター！■

他方、これも現実にはありえない映画だけの話だが、米国防総省（ペンタゴン）国家軍事指揮センターの大スクリーン上には、ドミトリー・ドゥロフ（ロシア国防相）（ミハイル・ゴア）が、ニコライ・ザカリン大統領を監禁し、その護衛達を殺害するシーンが映し出されたからビックリ！何とこれはドミトリー国防相によるクーデターだ！

ジェーンは、ニコライ・ザカリン大統領がロシアのポリャルヌイ海軍基地に向かっているという情報を事前に把握していたから、本作冒頭に見たコラ半島沖での米原子力潜水艦タンパ・ベイの沈没情報に大きな危惧を抱いていたが、このクーデターはその延長で、事前に計画されていたものらしい。すると、ロシアでは「大統領が戦時に病気になれば、全権が国防省に「移行される」から、ドミトリー・ドゥロフ国防相は、ニコライ・ザカリン大統領を監禁して「全権は国防相にあり」と公布することによって軍部を掌握し、対米戦争を起こすつもり・・・？

本来は、そんなロシア内々の事情がリアルタイムで米国にわかるはずはないが、本作では国家軍事指揮センターにそんな映像が映し出されるからすごい。しかし、そんな映像が送られてきたのは一体、なぜ？

■ネイビーシールズの活動がここでも！こりゃお手柄！■

アメリカには、米海軍特殊部隊（ネイビーシールズ）がある。その活躍ぶりはオサマ・ビンラディンの射殺で実現されたが、『ネイビーシールズ』（12年）では「その最前線を追体験」することができた（『シネマ29』126頁）。しかして、本作は「潜水艦モノ」であるにもかかわらず、「ネイビーシールズ」の活躍も描かれるので、下手すると興味が分散してしまうが、本作では「1粒で2度おいしい」内容になっているので、それにも注目！

ビル・ビーマン隊長（トビー・スティーヴンス）率いるネイビーシールズの一部隊の任務は、ポリャルヌイ海軍基地に潜入して情報を集めること。それ自体はもちろんしんどい任務だが、「オサマ・ビンラディンを殺せよ」という命令ほど過酷ではない。空中からパラシュートでポリャルヌイ基地に降り立った隊員たちは、その任務を遂行すべく基地近くに潜入し、さまざまな道具を使ってポリャルヌイ基地の様子を撮影し、その映像を国家軍事指揮センターに送っていた。もちろん、これは極秘任務だから、たとえその任務中に殺

されても“名誉の戦死”とはならないそうだが、それはネイビーシールズになった時から覚悟のうえ。しかし、この情報収集の任務が終われば、ポリヤルヌイ基地まで迎えに来てくれている米潜水艦に乗って帰還するだけだから、まあ今回の任務はチョロイもの。

隊員たちはそう思っていたようだが、送った映像から、ディミトリ・ドゥーロフ国防相のクーデターが判明し、ニコライ・ザカリン大統領が拘束されたことがわかると、今度は何と「ニコライ・ザカリン大統領を救出し、米潜水艦に乗せて脱出せよ！」というとても命が！そんなアホな？そんなこと言われても、できっこない！新入りのマルティネリ（ゼイン・ホルツ）を含めホール（マイケル・トルッコ）、ジョンストン（ライアン・マクパートリン）たち隊員たちはそう思ったが、百戦錬磨のビル・ビーマン隊長は事もなげにその任務に向かうことに。もちろん、これ以降彼らが繰り広げるニコライ・ザカリン大統領救出作戦は、『ランボー』（82年）や1000億円の興行収入を叩きだして大ヒットした中国映画『戦狼2 ウルフ・オブ・ウォー2』（17年）（『シネマ 41』136頁）の主人公、冷峰（呉京）と同じように、映画の上だけの話して現実にはありえないものだが、それを前提としてその活躍ぶりをじっくり楽しみたい。

■□■基地への潜航作戦はスリル満点『U・ボート』を彷彿■□■

『U・ボート（ディレクターズ・カット版）』のみどころは多いが、後半のハイライトはジブラルタル海峡突破作戦だった。連合軍の支配下にあり、「処女のあそこのように狭い」ジブラルタル海峡を、U・ボート一隻だけで突破するのが至難の業であることは明らかだが、敢えてそんな作戦に挑んだのは一体なぜ？用意周到に練り上げた作戦は成功するかに思われたが、突然の飛行機の来襲は予想外？さらに駆逐艦の登場によって執拗な爆雷攻撃にさらされたU・ボートの運命は？その息詰まるような駆逐艦との対決と、海底に沈んだU・ボート内でのわずかな可能性にかける乗組員たちの献身的な生き抜くための努力の姿は感動的だった。

しかして、本作後半のハイライトもそれと同じように、機雷原とソナー網だらけの海底を突破して、ポリヤルヌイ海軍基地へ向かうアーカンソーの姿になる。この作戦はニコライ・ザカリン大統領を救出したネイビーシールズの隊員たちを収容して、出港地であるイギリスのファスレーン海軍基地に戻るためのものだが、それがかなりハチャメチャな作戦であることは、『U・ボート』におけるジブラルタル海峡突破作戦と同じだ。そんな無茶な作戦をグラス艦長が遂行するについて頼りにしたのは、何と敵原潜の艦長アンドロポフだ。「お互い船乗りだ」から始めたグラス艦長の言葉は相当説得力があったようで、アンドロポフ艦長はそれを承諾したからビックリ。こうなると「男と男の約束」、「艦長と艦長の約束」は固い。ジョー・グラスが見ている海図では行き止まりで万事休すと思われたところ、アンドロポフは「この海図は間違っている」と述べて、アーカンソーの進路を指示したからすごい。もし、それがインチキだったら、アーカンソーはお陀仏だが、さてアーカンソ

一の運命は？そんな緊張感いっぱいのファスレーン基地へのアーカンソーの潜航作戦は見どころいっぱいだから、しっかり楽しみたい。

■□■救出は大成功！しかし、行きはよくても帰りは？■□■

ネイビーシールズによるニコライ・ザカリン大統領救出作戦は、隊員たちの神がかり的な戦闘能力と、命懸けで大統領の護衛任務に当たったオレク（ユーリー・コロコニコフ）たちの犠牲によって見事に成功。そして、アーカンソーに搭載されている救難艇ミスティックを活用しての、傷ついたニコライ・ザカリン大統領の収容も、危機一髪で間にあった。すると、その後は再び潜航してポリャルヌイ海軍基地から脱出するだけだが、行きは良くても帰りは恐い。だって、今やポリャルヌイ基地に潜入したアーカンソーの存在はロシア側に明らかなのだから、駆逐艦による攻撃はもとより、基地からのミサイル攻撃も可能なのだから。現実には、ドゥーロフ国防相からアーカンソーの撃沈を命じられたロシアの駆逐艦からはありとあらゆる執拗な攻撃が……。こうなると潜水艦はもろいもの。『U・ボート』と同じように、アーカンソーも海底の奥深く潜ってじっと嵐が去るのを待つしかないが、それだけではとてもとても……。

本作が面白いのは、そんな極限状態の中、アーカンソーを執拗に攻撃するロシア駆逐艦の乗員たちがすべて、アンドロポフ艦長が手塩にかけて育てたロシア軍人であったことのもつ意味が急浮上してくることだ。今、アーカンソーにはロシア大統領ニコライ・ザカリンが乗っている。その大統領が乗っているアーカンソーを撃沈するのはロシア軍人のやるべきことなのか？グラス艦長はアンドロポフ艦長に対して、それを駆逐艦の隊員たちに伝えるよう要請したが、さて、そのことの効用は？

『空母いぶき』でも、ラストは「いぶき」の撃沈間違いなしという絶体絶命の状況下で国連軍が登場してくるあっと驚く展開となり、想定外のハッピーエンドを迎えたが、本作もそれと同じように想定外のハッピーエンドになるので、それに注目！なるほど、これが軍人同士のホントの友情、信頼なのか！これも、多分現実にはあり得ない映画ならではの姿だが、私はそれなりに胸を熱くすることに……。『眼下の敵』のラストを少しでも彷彿させる本作のそんなラストは、あなた自身の目でしっかりと。

2019（令和元）年5月3日記